

## 文 献 紹 介

足利健亮編：『京都歴史アトラス』

中央公論社 1994年9月

A4判 155ページ 6,311円（本体）

京都の建都1200年を記念して1994年秋に出たこの『京都歴史アトラス』は、その帯カバーに記されているように「京都の全歴史を地図で読む」べく「学際的叢知を結集し、多年の歳月をかけた完全オリジナル地図110点を収録」した画期的な歴史地図帳である。しかし、地理学界でもそのほかでも、意外に知られていない。

書評や紹介は、編者・執筆者と近い立場の者はすべきでないと思って、ひかえていたのだが、少しでも多くの方に知っていただきたいと思い、遅ればせながら取り上げることにした。

まず、目次によって内容の概要を示そう。

### I 京都入門—古都への誘い— (7-14頁)

京都へのアプローチ、京都市街の変遷と住所表記、京都御所—その形成と変貌、[京の大路・小路—東西路]

### II 遷都以前の京都—長岡京まで— (15-26頁)

先土器・縄文・弥生時代の遺跡、古墳・飛鳥・奈良時代の遺跡、長岡京の地形と宮城中心部、長岡京の整備、長岡京の京戸の生活、[航空写真—今と昔]

### III 平安京—都の起こり— (27-44頁)

平安京の位置と四神、平安京の平面図、都の構造、貴族邸の風景、院の御所、遊獵空間としての野、平安京郊外の条里と荘園、【源氏物語】の世界、[平安宮の遺跡]

### IV 中世の京都—武士と町衆— (45-58頁)

六波羅とその周辺、武家邸と商人の分布、中世寺院の分布、町と町家の形、中古京師内外地図の風景、[金閣寺の遺跡]

### V 戦国の京都—激動する洛中洛外— (59-76頁)

応仁・文明の災、祇園会と山鉾、本願寺寺内町、織田信長と京都、豊臣秀吉と聚楽第、洛中洛外図の風景、伏見城と城下町、戦国期の城郭群、[京の大路・小路—南北路]

### VI 近世の京都—賑わう花洛— (77-98頁)

江戸初期の京都、慶安5年図に描かれた京都、辻子と突抜、あきないの諸相、ある貴族の生活空間、京都に求心する街道、洛外の名所、あそびの空間、淀城と城下町、幕末・明治維

新の遺跡、[洛中と今出川]

VII 近代／現代の京都—王都から産業都市へ—

(99-130頁)

京都御苑の整備、建都1100年記念事業、三条通と文明開化、地形図と地籍図にみる明治の京都、琵琶湖疏水、近代の工業、京都の鉄道、太平洋戦争と京都、人口の分布と変化、現代の工業、錦市場、町並の移り変わり町並保全、高さと景観、[京の町家]

あとに付録として、京都盆地の地形、京都の美術館・博物館マップ、京都の寺社マップが続く。

執筆者は編者を含め22名、うち15名までが地理学を専門とする。ほかに3名が日本史、2名が考古学、1名が環境デザイン、1名が地図・製図を専門としている。

上記の各章の中の節は、それぞれ見開き2頁立てで構成されており、各章の最後に [ ] 付きで示したものは、1頁立てのトピックである。

各章にはもちろん最新の学際的研究成果が盛り込まれており、古都京都について各時代の政治・経済・社会・文化の諸相が、きわめていきいきと描かれていることが、上記の簡単な目次紹介からもお分かりいただけると思う。

そして各節には、地図や文章による説明のほかに、さまざまな絵図や例えば「洛中洛外図屏風」の鳥瞰図、名所図会類に載っている版画のような絵画、さらに航空写真や現況を示す多数の景観写真、またグラフが掲げられ、ヴィジュアルに理解できるように配慮されている（全頁カラー）。一般の読み物としても、すこぶるおもしろい。

執筆者の大半が地理学者であるため、現況との対比、現景観との照合にとくに意が用いられ、また、地図・製図のエキスパートである森三紀さん（京都大学・立命館大学非常勤講師＝地図学担当）が加わっているため、地図の表現法に画期的な工夫が見られる。ここでは以下、とくにこの地図表現の工夫について述べることにしよう。

歴史地図は主題図の一種であるが、主題図の表現について考える場合、重要なものとして、表現の「忠実度」という問題と「基図」（ベースマップ）の問題とがある。

地図の図法での「正積」や「正角」の「正」はドイツ語の *treu*（忠実な）という語に相当し、

何について忠実であるかを示している（「正積」は flächentreu, 「正角」は winkeltreu である）。かつて、この森さんと私の共著『地図表現入門』（大明堂, 1988）で述べたように、主題図では、忠実度に次の3段階がある。

- ①正形状 situationstreu (実形実尺)
- ②正位置 positionstreu (位置が忠実)
- ③正範囲 raumstreu (範囲が忠実)

これらは地図の縮尺とも関連しており、大縮尺地図では多くの対象が正形状（実形実尺）で描かれるが、縮尺が小さくなるにつれそれが無理になって、正位置図、さらに正範囲図となる。

ところで、正形状図と正位置図の場合、主題を示すための基図がとくに重要である。この『京都歴史アトラス』の最大の特徴は、基図に格別の工夫がこらされているという点にある。

先史時代から現代に至るまで、このアトラスに掲げてあるオリジナルな地図は、縮尺約10万分の1から約5000分の1程度の基図を用いて描かれているが、これらは

a) 国土地理院発行の5万分の1, 2.5万分の1地形図や、京都市発行の2500分の1都市計画基本図など、既存の一般図を原寸大か、または多少縮小して、それを基図として用いた場合と、

b) このアトラスのために森さんが新たに作成した3種類の基図（縮尺は10万分の1, 5万分の1, 2.5万分の1の3段階）を用いた場合とがある（3種はそれぞれもう少し大きな縮尺で原図が作られたそうであるが、表現対象の広がりや配慮して使い分け、ほぼ10万分の1前後、5万分の1前後、2.5万分の1前後に縮小している）。

そしてこれらの基図は、浅緑または若葉色とも呼ぶべき淡い緑色で印刷されているが、等高線、道路、鉄道や主要地名など基本的内容はベタで印刷されているのに対し、地色は10%のアミで、また河川・池など水界はそれより少し濃いアミで印刷され、さらに山地については左上から光を照射したボカシが印刷されている。つまりb)の新規作成基図については、ベタで印刷する版と、10%のアミ版、水界のアミ版、ボカシの版という4種の版が用いられている。

そしてこれらの基図は、原則として現況を示している（地形図のうち若干は、明治の複製地形図や大正11年の5万分の1など、旧版地形図が使われているが）。したがって、表現されているものが現在の京都市街のどこにあったか、今のどこに

相当するかを、具体的に押さえることができる。

平安京の街路が2.5万分の1地形図を基図として示されているばかりでなく、当時の貴族の邸が1万分の1の基図に実形実尺で示されているので、それらが現在のどこに当たるかがはっきり分かるし、また、例えば山科本願寺の寺内町は、その広がりや5000分の1の基図（2500分の1都市計画基本図を50%縮小）に示され、また京都から各地へ伸びていた街道は、10万分の1の基図にそのルートが描かれ、さらに明治42（1909）年現在の市内の工場は、業種と従業員規模に応じて記号化されて5万分の1の基図に位置が示されている。

このように、さまざまな事象が、面・線・点のいずれについても、現在のどこにあったかが明確に分かるように示されているのである。

現在の地図に示されていれば、実際にそこへ出かけ、自分の足でそこに立ち、自分の目で観察することができるわけで、それにより新たな発想の展開も期待できる。現況を明快に示す基図を用いたことの、最大の効用がこれである。少しかさばるけれど、京都観光の案内書としても役に立つ。

かつて松原信之『若越城下町古図集』（古今書院, 1957）という城下町古図集が出た。これは福井県のいくつかの城下町の絵図を、方位・縮尺の正しい地図に表現しなおしたもので、異色ある古図集として注目されたが、町の各部分が現在のどこに相当するか、直接的には示されていない。

近年刊行されたヒュー・クラウト編、中村英勝監訳の『ロンドン歴史地図』（東京書籍, 1997）[原書は The Times, London History Atlas, edited by Hugh Clout, 1991] は、地図を含め多くの図版・写真を掲げてロンドンの歴史を語るという点で興味深い本であるが、歴史地図としては『京都歴史アトラス』に及ばない。それは、例えば中世や近代初頭のロンドンにおける街路や教会・商店その他の諸施設の所在を示した詳しい地図（方位・縮尺の正しい）が掲げられているけれども、それらが現在のどこに相当するかが、必ずしも明確ではないからである。

以上『京都歴史アトラス』について、とくに一つの側面（歴史地図として最も重要と思われる、現況との照合という側面）に絞って、その特色を紹介した。このすばらしい歴史地図が、広く活用されることを念じて止まない。

（浮田典良）